

蘇軾の「窮」と「工」をめぐる理論について

著者	高橋 明郎
雑誌名	中国文化：研究と教育：漢文学会会報
巻	51
ページ	33-44
発行年	1993-06-26
URL	http://doi.org/10.15068/00150147

蘇軾の「窮」と「工」をめぐる理論について

高橋 明 郎

文芸の地位回復の意味をこの理論は持っているのである。

それではこの「窮而後工」という口当りの良い論は、歐陽脩の次の世代にどう受け継がれ、その際欧陽脩の確保した文芸の独自性はどう処理されたのか、その検証を直系の弟子である蘇軾について行いたい。

従来、蘇軾の「窮」と「工」の論は欧陽脩の単なる後継と見られている。このテーマの歴史的概観の基本文献と言うべき張健氏の「詩窮而後工説之探究」⁽²⁾でも、蘇軾自身も友人も官途不遇であったので、欧陽脩の理論に最もよく反応しているとしている。そして「詩により窮する」という論、「窮して詩が工みになる」という例を紹介している。⁽³⁾

劉国珣氏も幾つかの詩を例にとつて、新法党に排斥された経験から「詩窮而後工」に非常に共感しているとする。⁽⁴⁾

しかし、私は「詩能窮人」という欧陽脩の否定したテーマが、蘇軾によって度々表明されているという一事を以てしても、蘇軾の論が欧陽脩の論の単なる後継とは見なせ

文人の「窮」と、その作品の「工」との関係について、古来中国の文人たちが意見を述べてきた。就中欧陽脩の『梅聖俞詩集序』（『居士集』巻四二）は一つの集約点であった。

「（然則）非詩之能窮人、殆窮者而後工也」という欧陽脩の論は、「発憤著書」説の流れから宋初の文人達が載道の文学観に則って想定した著述の成果の尺度、即ち「道」が作品中でどれだけ表現されているかという道德的尺度に代えて、表現技巧上の尺度「工」を置いたという点に特色があるのは無論のことだが、同時にこの「首のすげかえ」により幾分かの矛盾をかかえこむこととなった。その矛盾の救済は、従来一括りにされてきた「文」から「詩」⁽¹⁾のような文芸的ジャンルを別に考えることで行われた。宋初の一部の文人は詩文の内容にまで強く道德を求めたのに対して、

ないと考える。本稿では、まず欧陽脩との相違点を示して、その意味するものを考えてゆく。

二

まず欧陽脩の考えにそった「窮而後工」の立場の発言を見てみる。

張・劉二氏の引く次の詩は、確かに欧陽脩の論の受けうりを、あられもなく行っている。

…非詩能窮人 詩ノ能ク人ヲ窮セシムルニハ非ス

窮者詩乃工 窮者ニシテ詩ハ乃チ工ナリ

此語信不妄 此ノ語信ニ妄ナラズ

吾聞諸醉翁 吾諸ヲ醉翁ニ聞ケリ

(『僧惠勤初罷僧職』詩集卷一二)

詩人は窮するものという觀察は、しばしば蘇軾に見られる。

詩人固長貧 詩人ハ固ヨリ長貧

日午饑未動 日午饑ヘテ未ダ動カズ

(『次韻李公擇梅花』詩集卷一九)

これは単に詩人が窮している事実の確認にすぎないが、他に「窮」が詩文の成果に反映されるという考えは幾つもある。

…詩人例窮蹇 詩人例トシテ窮蹇

秀句出寒餓 秀句ハ寒餓ニ出ヅ

(『病中大雪數日未嘗起觀、號令趙薦以詩相屬、戲用其韻答之』詩集卷四)

…黃金散行樂 黃金ハ行樂ニ散ジ

清詩出窮愁 清詩ハ窮愁ニ出ヅ

(『九日次定國韻』詩集卷三三)

…又知詩人窮而後工、然詩語明練、無衰憊氣、如季札者聽之、亦有以知君之晚節也。

(『與錢濟明書』8文集卷五三)

…管卿亦貶武當、饑餓窮困、本書生常分、僕處不戚戚固宜獨、怪管卿以貴公子罹此憂患、而不失其正、詩詞益工、超然有世外之樂、此孔子所謂「可與久處約長處樂」者也。

(『題王管卿詩後』文集卷六八)

これらは表面は「窮而後工」でまとめられるが、しかし欧陽脩との相違は既に見える。それは欧陽脩の論が「窮」を、志を遂げられぬ不遇として扱っているのに対し、蘇軾はそれを貧窮のニュアンスで扱っていることである。(この事は張健氏もコメントを加えている。)貧窮は、もとより君子、士の情況としてしばしば述べられた「窮」の意味

として、古くより存在している。そもそも君子の「窮」は、(1)貧窮、(2)志を遂げられず社会的に栄達を得られない、或は(3)危機的状况という様々な使われ方をしてきた。しかし「窮」と「工」をまとめる際、歐陽脩は(2)の点にしぼって論を組み立てている。その意味では蘇軾とずれが有るのである。

とは言え、私の考えでは、蘇軾がここで持ち出している「貧窮」は、(2)の結果起っている表面的状況を指しているにすぎず、「工」の根本的原因是志を得ないことでなくてはならない。何故なら、単なる貧窮では、歐陽脩の理論の主要な部分、つまり著述の動機の説明と、題材に触れる機会となる放浪の原因の説明が成り立たなくなるからである。蘇軾が新たに「貧窮」を主因とする「窮而後工」の立論をしていない以上、やはりこれまで見てきた部分は、歐陽脩の「不得志」を主因とする論理の枠内で述べられた事であり、ただ表現上、「不得志」から生れる「貧窮」のニュアンスを強調していると考えるべきである。

さて、次の詩文は、また別の面で欧陽脩との差を示すものである。

謫仙竄夜郎

謫仙ハ夜郎ニ竄セラレ

子美耕東屯

子美ハ東屯ニ耕ス

造物豈不惜 造物豈ニ惜シマザラン

要令工語言： 語言ニ工ナラシメムト要ス

〔次韻和王鞏〕詩集卷二七

李白と杜甫を、蘇軾は窮して詩文が工みになった者と考えるが、それは造物主が二人の不遇を憐み、代償として彼らに語言の工を与えたと言うのである。張氏が「詩能窮人」の例として引く『次韻張安道詠杜詩』（詩集卷六）でも

：詩人例窮苦 詩人ハ例トシテ窮苦

天意遣奔逃 天意奔逃セシム

と天意の存在をからめる。（この詩は詩人の窮の状態を述べただけで、特に詩が原因という立場は取っておらず、張氏のまとめには無理が有ろう。）これは別に李白や杜甫にのみ持ち出される考えではない。

：天憐詩人窮 天ハ詩人ノ窮ヲ憐ミテ

乞與供詩本 供詩ノ本ヲ乞與ス

〔僧清順新作垂雲亭〕詩集卷九

のように一般論としても言われる。

このように詩人は窮により詩が上達するという事態の裏に天意なるものを想定し、詩人は詩人としての完成の為に辺地に置かれるように運命づけられている、或は天が詩人

の窮を憐れみ才を与える、詩材を提供するという考えは、辺境の美にうたれた柳宗元の『小石城山記』（『柳河東集』卷二九）中の表明を連想させる。

歐陽脩は窮者の詩が工となる理由の一つとして天涯の美に接する機会を得ることを挙げる。天涯に詩の材たりうる景物の存在を認める。しかし柳宗元が言及したような、そうした地理的配置を行った超越者の存在は彼の論から消え、単に窮者が詩の材となる景物に触れられるという論に止めた。作家とその環境の關係の中で論をまとめ、それが欧陽脩の論に合理的な印象を持たせるのである。

蘇軾の論では天意が正面から持ち込まれる。作品が工たりうるのも、もともと作家自身の研鑽というより天のねらいによるものなのである。作家が窮するのも、そうした一連の天の措置の一環である。この点は欧陽脩と異る所である。

しかし、「窮」のニュアンスの変化、もしくは天意の認定といった欧陽脩との相違点を特に「工」とからめ整理して理論化し直すということを蘇軾は行わなかった。一方欧陽脩が「工」の根拠とした事柄も散発的に表明されるのみである。蘇軾の流謫の地である黄州や惠州の山水をはめる言も少くないが、それが創作に寄与するという考えは、杭

州時代の

：遣子窮愁天有意

子ヲシテ窮愁セシムルハ天ニ意有

リ

吳中山水要清詩

吳中ノ山水清詩ヲ要ス

（『和晁同年九日見寄』詩集卷一四）

という詩に見える程度であり、また、貶地での政務閑散が著述の時間を保証するという考えも、

：著書多暇眞良計

書ヲ著スニ暇多キハ眞ニ良計

從官無功漫去郷

官ニ從ヒテ功無ク漫リニ郷ヲ去ル

（『病中聞子由得告不赴商州』1詩集卷四）

と述べられる程度である。著述の動機についても

木落騷人已怨秋

木落チテ騷人已ニ秋ヲ怨ミ

不堪平遠發詩愁

平遠ニ堪ヘズ詩愁ヲ發ス

（『郭熙秋山平遠』2詩集卷四九）

と「發憤著書」に近い考えを繰り返しているにすぎない。

「工」をめぐって比較的まとまった記述が為されているのは、『南行前集叙』（文集卷一〇）で、

夫昔之爲文者・非能爲之爲工・乃不能不爲之爲工也。

と述べる所である。しかし、ここでは、創作が自然な動機によるものと言うのみで、その動機が何によってもたらされるかについては触れない。

こうして見てくると、蘇軾は「窮而後工」の立場について、歐陽脩と異なる面を示しつつも、それらを理論として自ら構成し直すことはせずに、時に師の言を引用し、時に逸脱をする極めて不安定な状を呈していることになる。

これは「窮而後工」の表明が、比較的早い時期に多くなされているのとも関連しているよう。遅いものは、元祐元年の『次韻和王鞏』と元祐五年の『次韻徐仲車』くらいで、ほとんどは杭州時代より前に当るものである。おそらくは師の歐陽脩の論を引きはしても、蘇軾自身の考えとしては必ずしも定着しておらず、自身の独自性をもってこの意見を取りまとめる機会のないままに、蘇軾は「詩能窮人」の度重なる言及の時期へと移行する。

三

歐陽脩の否定した「詩能窮人」というテーマを、蘇軾は度々述べている。

二子縁詩老更窮

二子詩ニ縁リテ老ヒテ更ニ窮ス

人間無處吐長虹

人間ニ長虹ヲ吐ク處無シ

（『與秦太虛參寥會於松江而開彥長徐安中適至分韻得風字』2詩集卷一八）

のように、他人の窮情からこのテーマを持ち出す場合もあ

るが、むしろ蘇軾自身のことを実例とするものが多い。

平生文字爲吾累 平生文字吾ガ累ヲ爲ス

此去名聲不厭低… 此ヨリ去リ名聲低キヲ厭ハズ

（『十二月二十八日蒙恩賁授檢校水部員外郎黃州團練

副使復用前韻』2詩集卷一九）

吾窮本坐詩 吾ガ窮ハ本詩ニ坐ス

久服朋友戒 朋友ノ戒

（『孫莘老寄墨』4詩集卷二五）

…平生坐詩窮 平生詩ニ坐シテ窮ス

得句忍不吐 句ヲ得レバ吐カザルニ忍ビンヤ

（『叔弼云履常不飲故不作詩勸履常飲』詩集卷三四）

…我亦困詩酒 我亦タ詩酒ニ困シミ

去道愈茫渺… 道ヲ去ルコト愈々茫渺タリ

（『將至廣州用過韻寄邁迨二子』詩集卷四四）

これらの詩は、いずれも元豐以後に書かれている。⁽⁹⁾

四聲可罷之、萬一浮沈、反爲患也。…（『與滕宗道書』

43文集卷五一）

の書簡も、詩作により人生が変転するのを認める。蘇軾が「詩能窮人」とする根拠は何であらうか。

…詩能窮人、所從來尙矣、而於軾特甚。今足下獨不信、建言詩不能窮人、爲之益力。其詩日已工、其窮殆

未可量、然亦在所而用而已。

〔答陳師仲主簿書〕文集卷四九

ここでは蘇軾が歐陽脩の否定したテーマを開陳するのに對して、陳師仲は歐陽脩のように、そのテーマを否定し詩に力を注ぐ。ここでの蘇軾の論拠は、「於軾特甚」とあるように、自身の経験である。烏台詩案に代表される、彼の詩文による蹉跌に照らせば、正に黃州への流謫の時期以降に、この考えがしばしば言われるのも無理からぬところである。「詩能窮人」は理論として組み立てられたというよりも蘇軾の経験則である。言いかえるならば、蘇軾がこの「詩能窮人」を語る時、この「詩」は彼の失脚の原因となつたもの、政治的内容の詩を示すと考えられる。

このことは注意すべきことである。何故なら詩が窮の原因とする説は、例えば韓愈が『與陳給事書』（『韓昌黎文集』卷三）で説いたように、詩文が工みとなり、名声を得、榮達に至りその名声が朋輩の嫉みを買い、結果非謗されて窮するという形で説明される。しかし蘇軾に於ては、原因となる詩文創作から、中途の名声云々の過程を欠いて、直接「窮」という結果に至っている。この創作は、今述べたように政治的な創作という、極めて限定的な文脈で捉えられる。当然そこでは、その創作の「工」か否かは主

要な要素ではなくなる。

つまり「詩能窮人」は、前章で見たのと同様、歐陽脩の使用した言葉で語られながら、実は唐の論とも歐陽脩の論とも、ずれが生じているのである。

四

ここまで見てきたように、歐陽脩の論を、ニュアンスのずれを含みつつも、表向き継承してきたように見える蘇軾は、彼の後半生に至り歐陽脩の否定したテーマをしばしば述べ、歐陽脩の主張したテーマは後退してゆく。「詩能窮人」では、前章で述べたように「工」は重要性を失っている。ということとは、「工」は蘇軾の中で結局十分に育たなかった価値だと言えよう。それは何故であろうか。

これを考える際重要なのは、彼が後半生ある考えをふくらませて行つたという事である。それは「不朽」、身分不安定な自分が亡んでも、後世まで自分の存在の証なる名篇を残すことへの強い憧れである。後世に名が留まることは、なるほど古代の文人にとっても憧れであり、歐陽脩も滁州貶謫で同じような望みを表明した。しかしそれらに比しても執拗に、蘇軾は「不朽」を求めるのである。

文は歴史を超え残るものという考えは早いうちから見ら

れる。熙寧末の詩に言う。

生前富貴死後文章 生前ノ富貴死後ノ文章

百年瞬息萬世忙 百年瞬息萬世忙シ

『薄薄酒』1詩集卷一四)

次は壁記を依頼されての文である。

…今余頑鄙自放、而且老矣、然無以自表見於後世、自計且不足、而況能及於子乎！雖然、不可以不一言、使數百年之後、得此文於頽垣廢井之間者、茫然長思而一歎也。〔密州通判廳題名記〕文集卷一一)

官途不順の時期には、当然ながら文章に頼り名を残そうという意識は強くなる。試みに惠州時代の文を引く。

…自惟無狀、百無所益於故友、惟文字庶幾不與草木同腐、故決意爲之、然決不以相示也。〔與孫志康書〕

2文集卷五六)

不朽の対象は、主として「文」として示されるが、それ以外、例えば「書」を対象とした表明も、わずかながら見られる。惠州の蘇軾のもとへ蘇州の卓契順が訪ね書を書き、蘇軾は『歸去來詞』を書すが、それについても

…故爲書淵明歸去來詞以遺之、庶幾契順託此文以不朽也。〔書歸去來詞贈契順〕文集卷六九)

こうした「不朽」への願望は、本来なら創作の激化とし

て蘇軾の行為に反映されて然るべきものである。しかし詩文により窮するという考えを連発するようになった時期の蘇軾にとっては、これも当然のことに創作を自制せざるを得なくなった。少くとも作品を世間に出すことには、非常に神経質になっていった。今引いた『與孫志康書』の中にも作品の伝播への懸念が見えるし、幾つかの書簡でも、創作自体の自制が表明される。

…蓋子由近有書、深戒作詩、其言切至、云當焚硯棄筆、不但作而不出也。不忍違其憂愛之意、故遂不作一字、惟深察。〔與程正輔書〕16文集卷五四)

蘇轍に限らず「不作詩」は多くの者に勧告され、自らもしばしば「不作詩」を表明した。この抑制は詩ばかりではない。

…所示、反復思之、亦欲有以少慰孝子之心、而某所不敢作者、非獨銘誌而已。至於詩賦贊詠之類、但涉文字者、舉不敢下筆也。〔答李方叔書〕10文集卷五三) このように多くのジャンルにわたる創作の抑制とともに、作品の伝播にも格別の注意が払われる。

…自得罪後、不敢作文字。此書雖非文、然信筆書意、不覺累幅、亦不須示人。〔答李端叔書〕文集卷四九) ここでは書簡さえもが心配の種である。こうした抑制はあ

る期間続く。黃州時代の書簡に言う。

…又多難畏人，不作一字者，已三年矣。（『與上官彝書』
3 文集卷五七）

これら一連の創作への懼れは「詩能窮人」と表裏をなすものである。それは次の文からも知れる。

…軾平生以文字言語見知於世，亦以此取疾於人，得失相補，不如不作之安也。以此常欲焚棄筆硯，爲瘖默人，而習氣宿業，未能盡去，亦謂隨手雲散鳥沒矣。（『答劉沔都曹書』卷四九）

この後、世間に出回った自分の文は眞偽半々であると嘆く。この文でも少し触れているが、今日残る詩文が示すように「不作詩（文）」はポーズである。しかし、前章のように政治的作品という限定的文脈で読めば、その決意は果されていよう。いずれにせよ、こうした従来自分が名声を得ていた分野で自制が行われ、意のままの創作活動が行えないという状況下、蘇軾は結局どこに「不朽」を求めることになったのであろうか。彼が最も不朽たらしめんと心を配ったのは、もはや詩ではなかった。

…來詩愈奇，欲和，又不欲頻頻破戒。自到此，惟以書史爲樂，比從仕廢學，少免荒唐也。（『與王定國書』

13 卷五二）

黃州時代のこの書では「不作詩」を示すと同時に書史の楽しみを述べる。書史とは明らかに彼の創作の自制の外にある仕事であり、公言できるものである。文芸的分野と全く別箇に、そうした規制外の領域を定めた。この領域の中でも経解に最も蘇軾は意を注いだ。黃州での生活を報告した、旧法派の重鎮文彦博への書簡は、まず次のように言う。

…到黃州，無所用心，輒復覃思於易・論語，端居新念，若有所得，遂因先子之學，作易傳九卷。又自以意作論語說五卷。

こう著述活動を述べてから、その保存への心配を言う。

…窮苦多難，壽命不可期。恐此書一旦復淪沒不傳，意欲寫數本留人間。念新以文字得罪，人必以爲凶衰不伴之書，莫肯收藏。又自非一代偉人不足託以必傳者，莫若獻之明公。而易傳文多，未有力裝寫，獨致論語說五卷。公退閒暇，一爲讀之，就使無取，亦足見其窮不忘道，老而能學也。（『黃州上文潞公書』文集卷四八）

ここでは自身の著述の安全な退避先として文彦博を選んだ理由を、著書の滅亡への懼れにからめ述べると同時に、「窮不忘道」とあるように、経解著述の姿を文彦博に宣伝している。師の歐陽脩は、嘗て諫官高若訥を批判して夷陵

令に貶された時、朝廷の下したこの処置は当然だとし、不満の言を連ねることを自ら強く戒め、謹慎の態度を中央に示すべく『五代史』の著述を行ったものであったが、そうした師の処世は、弟子にも受け継がれたのであった。しかし欧陽脩が当時懼れたのは中央の心証であって、まだ三十になつたばかりの若い欧陽脩にとっては将来の任用の準備が有ることを示せば良かったのに対し、蘇軾は既に四十路も半ば近く、このまま貶地で埋没することも十分可能性が有つただけに、その不朽の願望は切実であつた。(欧陽脩も中年の滁州貶謫では似た傾向を示している。)だからこそ比較的安心な経解の分野での仕事で不朽を図る必要が有つたのである。

これらの著述は、結局黄州ばかりか、終には晩年海南島にまで持ちこされ、その地で完成を見る。そして、ようやく不朽のものを為し得た喜びを蘇軾は隠さない。

：某年六十五矣、體力毛髮、正與年相稱、成得復與公相見、亦未可知。：所喜者、海南了得易、書、論語傳數十卷、似有益於骨朽後人耳目也。：(『答李端叔書』)

文集卷五二

五

このように、蘇軾は「窮而後工」を発展させることなく、「詩能窮人」の主張を重ねるに至る。この中で「工」の重みは彼の論の中で後退し、終には、その「工」の發揮されるべき詩文創作という行為すらもが、表向き抑制され、「不朽」の作として結局「経解」という仕事に傾斜してしまつた。

こうした経過は、今まで触れてきたように官途の不遇に關連することは無論であるが、そうした変化の背景には、蘇軾の文学観が有る。

第一に彼は文芸創作ということを、君子の行うべき諸行為の中でも、上位には置かない。『墨寶堂記』(文集卷一)冒頭の諧謔に満ちた自慢合戦の中途、文章の功用が持ち出される。

世人之所共嗜者、美飲食、華衣服、好聲色而已。有人焉、自以爲高而笑之、彈琴弈碁、蓄古法書圖畫、客至、出而夸觀之、自以爲至矣。則又笑之者曰、古之人所以自表見於後世者、以有言語文章也、是惡足好？不朽たる価値あるものとして持ち出された文章は、しかし直ちにけなされる。

而豪傑之士、又相與笑之。以爲士當以功名聞於世、若乃施之空言、而不見於行事、此不得已者之所爲也。

つまり文章をものして名を残そうなどは、行動で名を残せぬ者の取る手段でしかないとされてしまふ。ここでは創作という行為は、行動の下位に置かれている。

これは不朽たるものの順を示した左伝の言を引き継いだ考え方である。

しかも、その創作の中でも、蘇軾はジャンルにより順位を付ける。

與可之文、其德之糟粕。與可之詩、其文之毫末。詩不能盡、溢而爲書。變而爲畫、皆詩之餘。：（『文與可

畫墨竹屏風贊』文集卷二一）

ここでは、やはり創作は徳の付随物の位置しか与えられず、その創作の中でも詩は文より一段下に置かれている。

更に「不朽」は材質により残ることが重要なのではなく内容で残るべきであると述べる。

：孔壁・汲冢竹簡科斗、皆漆書也。終於蠹壞。景鐘、石鼓益堅、古人爲不朽之計矣。然其妙意所以不墜者、特以人傳人耳。：吾作易、書傳、論語說、亦粗備矣。：

（『題所作書易傳論語說』文集卷六六）

結局そもそも行動に比して低い地位しか与えられない創

作、その中でも文より下に位置付けられた詩は不朽の対象としては考えにくかったのであろう。

第二に蘇軾は体用論をよく唱えた作家である。作品は社会的効用を持つべしとする。その詩作面での実践は、政治詩という形で示され、この面の創作への自負は強かった筈である。政治詩の創作が続けば、創作の表現力の指標の「工」も生き続けたかもしれない。しかし烏台詩案にまきこまれたりして、この分野の創作は自制せざるを得ない。自らも「不作詩」を云云した時点で、詩には、嘗て蘇軾が見出していたような社会的意味が失われつつあった。本来「工」の最も反映できるジャンルの社会的意味の低下は、「工」の意味の低下につながる。

しかも、蘇軾の「窮而後工」説は、しばしば天意とともに語られる。「工」は文人独自の努力によつてのみ得られるのではなく、超越者により文人に付与されるべく仕組まれた価値なのである。「工」に至る過程での文人の努力の必要性は蘇軾も言うが、そのみで到達できるものではない。

しかしこの章で見た蘇軾の論に照らせば、天意で詩文が工みになるよう配されるといふことは決して名譽なことではない。何故なら、仮に天意が存在するなら、実際の政治

行動で力を発揮できるよう配されることこそ本懐であって、詩文が工みになるような配され方は、天に為政者として無能だと判定されたも同然だからである。

従って蘇軾は他人を「工」と称したり、その「工」を鑑賞すると記したりしても、自身窮して詩文が工みになったとも、窮の中で自作が「工」たりうるよう努力するとも表明しないのである。

もともと父の蘇洵は「工」を批判的に蘇軾に語っていた。⁽⁴⁾蘇軾はそうした下地を持っていた上、本章で見たような考えから文芸、特に詩の位置を高く把えず、政治詩の創作が思うにまかせないこともあり、自身を代表する著述として「経解」に傾斜し、結果歐陽脩の論をはじめ度々なぞりながらも、終に「工」を重視する立場には至らなかった。社会的功用を持つ詩の創作の自制を考え、詩の地位が彼の中で行き止まった時、蘇軾に於ける「窮」と「工」の論の命脈は尽きたのであった。

六

歐陽脩は「工」の発揮できるジャンルとして文芸の独自性を認め、又自らも貶地での閑適の中で文芸創作を行い、その意味も認めた。蘇軾は、なるほど同様に文芸が経解等

と違った独自の創作ジャンルとして認めたが、同時にそれは、行動よりも、そして又『左伝』の言う「立言」―教えの伝承の具体化とも言える経解の著述より下位のものと見られた。そのことは、蘇軾が貶地で「不朽」たる著述の分野を選択する際に、明瞭に示されたのである。

この意味で、「窮」と「工」をめぐる二人の文人の考えは対照的であったと言える。

註

- (1) 詳しくは拙稿「歐陽脩の文學理論―『梅聖俞詩集序』をめぐる」『第一部・第二部（香川大学教育学部研究報告）（第一部）七二号・七五号』参照。
- (2) 『中國文化批評論集』（天華出版事業公司・民国六八）所収。
- (3) 前者の例として『王定國詩集鈔』（文集卷一〇）『僧惠勤初罷僧職』（詩集卷一二）『贈寫真何充秀才』（詩集卷一二）『次韻徐仲車』（詩集卷三五）。後者の例として『邵茂誠詩集鈔』（文集卷一〇）『次韻張安道讀杜詩』（詩集卷六）『遊廬山次韻章傳道』（詩集卷一三）『冰池』（詩集卷一四）『續麗人』（詩集卷一六）。なお、本稿での引用は『蘇軾文集』（孔凡禮點校・中華書局・一九八六）『蘇軾詩集』（王文誥集註・孔凡禮點校・中華書局・一九八二）「それぞれ「文集」「詩集」と略称」による。
- (4) 『次韻仲殊雪中游西湖』（詩集卷三三）『次韻徐仲車』（僧惠勤初罷僧職）（ともに既出）。
- (5) 劉国珪『蘇軾文藝理論研究』（南開大學出版社、六八・六九

頁。

(6) 歐陽脩は極く初期には「詩能窮人」の表明をしたことが有るが、その後は一貫して「窮而後工」の立場に立っていた。

(7) 拙稿〔注1〕第一部一三頁以下参照。

(8) 例えば『答畢仲舉書』（文集卷五六）『舉朱康叔書』（文集卷五九）『書韓魏公黃州詩後』（文集卷六八）。

(9) 張氏の引く四首（注③参照）は、いずれも詩人が窮の状態にあるのを確認しているだけで、厳密には「詩能窮人」の立場を示すものとは考えられない。

(10) 『復次韻謝趙景貺陳履常見和兼簡歐陽叔弼兄弟』（詩集卷三四）『與孫志康書』2（文集卷五六）『與曹子方書』（文集卷五八）など。

(11) 『七月五日』（詩集卷一四）『答吳子野書』（文集卷五七）『與沈睿遠書』2（文集卷五八）『與滕遼道書』15（文集卷五一）『與江惇禮書』4（文集卷五六）『書李詩後』（文集卷六七）『與陳朝請書』2（文集卷五七）『與王定國書』8（文集卷五二）。

(12) 「大上有立德，其次有立功，其次有立言，雖久不廢，此之謂不朽。」（『左傳』襄公二十四年）。

(13) 詩による政治批判の分析は横山伊勢雄氏「蘇軾の政治批判の詩について」（『漢文学会会報』三一）に詳しい。

(14) 「…知日課一詩，甚等。此技雖高才，非甚習不能工也。聖俞昔常如此。…」（『答陳傳道書』3 文集卷五三）。

(15) 『答李昭圻書』（文集卷四九）。

(16) 「昔吾先君適京師，與卿士大夫遊，歸以語軾曰：自今以往，

文章其日工，而道將散矣。…」（『晁繹先生詩集跋』文集卷一〇）。

（香川大学）